

# 留学コーディネーター 山井 誉子 さん 32歳



山井さんと同様、ここニュージーランドで「自分の仕事」を見つけた日本人女性を招いて生徒の前で話してもらった「モチベーションアップ講演」も企画する。これまで、ニュージーランド航空のキャビンアテンダント、会社経営者などに登場してもらった。

## 自分の人生をステップアップ させたい女性の手助けを

山井誉子さんが働くのは、ニュージーランドの都市オークランド。留学エージェント「女性のためのピリ辛留学」の統括責任者として、日本からやってくる生徒たちをあらゆる面からサポートするのが彼女の仕事だ。じつは山井さん自身、ニュージーランドへの留学経験者でもある。彼女が留学を思い立ったのは、26歳のとき。商社で経理の職について3年が経ち、すっかり仕事に慣れた頃だった。「このままでもいいのだろうか」という漠然とした将来への不安。「誰でも

## 20代後半に自分がほしかった 情報を提供することで、同じように 迷っている女性をサポートしたい

できる仕事」ではなく、「自分だからできる仕事」をしたいという気持ち。そのためには、「これ！」と言えるものを手に入れたい。それが、留学を決意した理由だった。

3カ月の語学留学後、ワーキングホリデーを利用して、再びニュージーランドへ。かつてお世話になった留学プログラムを運営する旅行手配会社で、事務のアルバイトをはじめ。あるとき、会社の一部門として細々と運営していた留学プログラムを「女性にターゲットを絞って



オフィスにあるラウンジは、留学生同士の情報交換の場であり、唯一の日本語OKの場。宿題や復習を持ち込んでする生徒も。

絞ってはどうか」と社長に提案。「自分と同じような気持ちで留学を志す女性はいっぱい」という信念からだった。

「私自身が20代後半で感じていたのと同じ、追いつめられたような気持ち。このまま諦めたくない、人生の選択肢を増やしたい、という思いの女性の手助けをしたい。私ができるのは、これだ！と思ったんです」

そのためには、生徒にとって厳しい環境が必要だとも感じていた。通常の留学エージェントは、語学

学校やホームステイ先の手配をして、終わり。そのままでは、どうしても限界がある。語学学校では、ついつい日本人と仲良くし、日本語を話して過ごしてしまう。ホームステイ先でも、英語で話すのがおっくうで、家族と交流せず部屋に籠ってしまふ……。せつかくお金を出して留学したのに、英語を話せるようにならないまま帰る人たちが、多く見てきた。

「英語自体が難しいのではなくて、『英語と向き合い続けること』が難しいんです。私自身、日本にいたときは、家族や会社に守られて甘えていたので、自分一人で意志を貫きとおす難しさを痛感していました」

山井さんは、何ページにもわたる企画書で「女性が本心に求める留学プログラム」を提案。社長に「君にすべてを任せろ」と言わせることに成功する。ワークビザも取得し、'06年、プログラムは「女性のためのピリ辛留学」として一新、再スタートした。

彼女の仕事は、留学生たちが「英語と向き合い続ける」ための厳しい環境をつくりだすことだ。ホームステイ先をはじめ、あらゆる公共機関や店でのやりとりなど、生活のすみずみまで英語だけで貴くための指導。語学学校では日本語

ステイ先の家族にうまく心を開けない生徒には「ちょっとした失敗や、彼の話をしてみたら？」とアドバイスすることも。



Profile...  
La La Abroad「女性のためのピリ辛留学」ジェネラルマネージャー、日本からの問い合わせへの対応、生徒の空港送迎、生徒のビザの申請や語学学校の手配までもこなす。この1年で生徒は前年比3倍になった。  
<http://www.upi.co.nz/lala/>

で話すのを禁止。日本人同士で遊びに行くのも禁止。語学学校でわかななかったことをそのままにしないための補習授業。実地で英語を使う機会をつくるため、ボランティアやおけいこ、アルバイトなどを紹介し、自分で申し込ませる。現在、留学生たちは、20代後半から30代の女性ばかりだ。夕方、語学学校から帰ってきた生徒が、ラウンジにいる山井さんに「タカコさん、聞いてくださいよ」と声をかけてくる。彼女たちが日本語を話すことを許される貴重な時間を海外での生活や学習に悩む生徒へのカウンセリングも、重要な仕事のひとつ。日本での仕事を辞めて留学してくる生徒たちにとって山井さんは、働く女性の焦燥感を知るよき「先輩」でもあるのだ。